

太陽はゆっくりと傾きかけていた。のんびりとした時間の流れる亜丁村での一日もそろそろ夕暮れが近づき始める時刻だ。村の雑貨屋の片隅にホコリまみれで置いてあった四川の観光名所の写真集を眺めていると、

「あんたの友達が帰ってきたよ」

雑貨屋の主人が声をかけてきた。

ハッとして振り向くと、この土地で私の唯一の友達である「亜丁の少年」が雑貨屋の店先でバイクに跨ったまま笑顔を浮かべていた。狭い村の事だ。昨夜の少年の家で行われたパーティで、私と彼が友人である事は村のみんなに知られているらしい。私は少年に会えたことが嬉しくて顔を輝かせながら戸口に走り出た。

「何処に行ったの!？」

「仕事だよ。観光客の馬を引いてきたのさ」

なるほど先程まで閑散としていた亜丁村の目抜き通りは、仕事から戻ってきた村人達でにわかに活気づいていた。

バル〜ン!!バルル〜ン!!とエンジンの音を響かせて、小さなバイクに跨った少年達が次々に村の下方にある自然保護区の入り口から坂道を駆け登って来る。昨夜のパーティで少年と兄弟のように肩を組んで座っていた、まだ13歳だという男の子が小柄な身体で達者にバイクを操っていた。

「うわ〜、あの子カッコいいじゃん!」

こんな山奥の小さな村の住人にとってバイクは結構高価なものだろう。それをまだ子供ともいえるような年頃の少年達まで所有できる村の生活や、昨夜の亜丁の少年があれほど大量のビールを気軽に村人達に振舞っていた様子を見ると、やはり亜丁村は自然保護区の観光景気でだいぶ潤っている様子だ。

村の少年達の所作や風貌も他所でみかける素朴な田舎の子供といった様子とは一線を画し、少し長めに伸ばした髪を茶色く染めたりパーマを当てたりと、どこか粋がっているような、悪く言えばちょっと擦れている雰囲気の子供が多かった。ほんの数年前までは山奥で閉ざされていたであろう村の生活に、観光客が運んでくる都会の空気や生活が豊かになった事で都会の学校に出て行く子供達が増え、この山峡の小さな村にも急速に都会の文化が流れ込んでいるのだろう。

それにしても、観光で開かれている村といえば、私が一人で亜丁にやってくる前に当初の旅行メンバーで訪れた四姑娘山麓の村「日隆」などは、現在世界自然遺産にも登録されている四姑娘山への登山基地として、亜丁村とは比較にならないほど観光地としての歴史を持つ村のはずだ。私があつた村にいたのはほんの2、3日であったが、そこで私が出会った人達はやはり皆素朴な様子で、このような印象を持つ事は無かったように思えた。村の規模が違うために私の目に入らなかつただけなのか、それとも亜丁村の場合は余りに急激に変化した小さな村の経済状況の反動なのだろうか。楽しかった思い出と長い時間の思い入れにより強い愛着を感じている亜丁村の現実の姿に、私はかすかな違和感と戸惑いをちょっぴり感じていた。

心の片隅では微かにそんな事を思っていた私だが、目の前にいる少年は屈託のない笑顔を浮かべていた。やっぱりこの少年は特別だ。彼には特別に好意を持っている私の鼻頂目がそう感じさせているのかもしれないが、昨夜の踊りで光の粒に縁取られているようにみえた少年は、昼間の光の中で出会ってもやっぱり輝いているように私には感じられた。

「ここで何をしているの?」

「ううん別に・・・暇だったから」

これで会話は途切れてしまった。

会えて嬉しい気持ちはいっぱいだったし、話したい事も沢山ある筈なのに、相手はうーんと年下の少年だというのに、昨夜はあれ程会話が弾んでいた少年を相手に、今日はなんだか妙に照れくさくて言葉が出てこなかった。

昨夜、雨の中をバイクで送ってくれた少年は、宿に着くと紳士的に自分もバイクを降りて戸口の中まで私を送ってくれた。

「何て言ってもいいか上手く言えないけど、また会えて本当に嬉しく思ってるんだ」

薄暗い宿の土間で交わした短い会話の別れ際、親子に近い程にも年齢差のある私に少年はそう言ってくれた。そしてバイクが好きだと話していた私に、

「明日また会おう。君がバイクが好きなら、バイクに乗って一緒に遊びに行こうよ」

と言ってくれたのだ。

いつもの私だったら「ねえ、ねえ！待ってたよ！早く遊びに行こうよ～！！」とすぐさま声を上げるところだが、この時は何故だか会話の糸口がみつからず、そうでなくとも先程「30を過ぎた女なんて、この村じゃ誰も要らないぞ！」などと断言されてしまった雑貨屋の親父の手前、歳の離れた少年相手に舞い上がってる姿を見られるのが癪で余計に言葉が出てこないのだ。何となく言葉に詰っているのは少年の方も一緒の様でお互い笑顔を浮かべるだけで数分が過ぎた後、少年は「じゃあ、行くよ」とバイクを走らせて行ってしまった。

「あーあー、せっかく会えたのに・・・」

少年が去ってしまうと、何も話せなかった後悔にガッカリしてしまった私は宿に戻る事にした。宿の入り口辺りでぶらぶらしていると、道路を2台の車がギュワーンと走ってきて宿の庭先に停まり、中から数人の中国人の男性がバラバラと降りてきた。

「你好！！」

私が挨拶すると、車から降りてきた男達が言った。

「やあ！你好！小姐、君はここに泊まってるのか？宿はどんな感じだい？」

「ええ、いい宿よ。安いし、宿の主人は優しいし」

彼らは男性5人と女性1人、子供1人が2台の車に分乗し、北京から四川省にドライブの旅にやって来ているのだそうだ。

この土地の感想を聞かれ、私は話し相手ができる事を喜びながら例によって三年前に訪れたこの土地の美しさに魅せられ一人で亜丁を再訪している事、山の上の宝石のように美しい湖の事などを熱く語っていると、男達は「よ～し、この宿に決めようぜ！荷物を降ろせよ！」と声をあげた。総勢7名の新たな団体客の来訪で宿は俄かに活気付いてきた。

メンバーの一人が持っていた稲城の写真集を見ながら庭先で話をしていると、突然コケーッ！！コケーッ！！ギョワー！！とニワトリがけたたましく騒ぎ出し、何かと思えば北京メンバーの一人が庭先で放し飼いされていたニワトリを一羽捕まえて絞めていたところだ。呆気にとられて眺めている私に気付いた男は、たった今、絞めたばかりのニワトリを私に向かって差し上げて見せると「100元だ」とニカッと笑った。宿の主人に交渉して、今夜のおかずを一羽買い取ったという訳だ。

なんと、まあ・・・日本人には絶対に思いつかない食材の調達方に唖然とした私は、思わず成都に滞在していた折に見かけた衝撃の光景を思い出していた。

本来は1 2日間の旅程で四姑娘山の登山旅行に参加していた私は、旅行メンバーと別れ一人で旅を続けるにあたり中国でのピサ延長手続きを行っている間、成都のゲストハウスに滞在していた。そんなある日の朝、その日の朝食や旅の間の日用品などを買い求めに訪れた近所のスーパーでは、朝のタイムセールで生きたナマズのつかみ取りをやっていたのだ。

スーパーの中を長蛇の列となって並んでいる老若男女は熱気ムンムン、自分の順番がくるとウジャウジャとナマズの入れられた大きな水槽を囲み、目星をつけた活きのよさそうな奴を素手で捕まえワシワシとビニール袋に詰めていた。詰め終わった袋はその場で係員に秤で計ってもらい値札のシールを貼ってもらうシステムで、水飛沫をはね上げながらピシピシ、ヌルヌルと飛び跳ねるナマズと格闘しながら嬌声をあげ目当てのナマズに挑みかかっているおじさんおばさんのエネルギー溢れる姿の頭上には「新鮮命！！」とスローガンが書かれた旗がはためいているように見えたものだ。

食は生命の源である、食にかけるエネルギーが旺盛である事は即ち生きるエネルギーが旺盛であるという事に他ならないだろう。朝のスーパーで水槽の水しぶきに服が濡れるのも厭わずに、素手でナマズを掴んで騒いでいる熱気溢れる人々を目の前にして呆気にとられていた私は「日本人は到底この人達には敵わないな・・・」と感じたのだった。

そして今回、思わぬところで再び出合ってしまった「新鮮命！」の中国人魂である。私の拙い中国語の会話で知り得た話では、彼らのグループは北京で旅行者を泊めるゲストハウスの経営者夫婦と子供、そこの従業員でやって来た社員旅行のようなものらしく、ニワトリを絞めていたのはそのゲストハウスの料理長なのだそうだ。

しばらくして宿の食堂にあたる広い土間の一角にある調理場を覗き込んでみると、料理長は調理補助の仲間と共に持参した食材やまな板、包丁を駆使し、この宿の台所を完全に占領して奮闘中だった。旅行に出るのにまな板などの調理道具まで用意しているのには驚きだ。食堂の丸テーブルには彼らが持参した酒のつまみのような惣菜の皿が置かれ、早くもテーブルに座ってそれらをつつきなが

らビールを始めていた数人のメンバーが、「さあ！さあ！小姐も一緒に座って！！」と私をテーブルに招いてくれた。

亜丁に入ってから数日というもの、私が食べていたのは卵とトマトの湯麺のみだ。脇にある調理場で料理長がジャージャーと炒めている料理の匂いが漂い、テーブルの上に並び始めた料理はとても美味しそうだ。食卓命の中国人魂バンザイ！！である。並び始めた料理をチビチビとつまみながら宴会の開始を待っている北京グループの人達と話していると、宿の庭先に2台のバイクが入ってきた。亜丁の少年が友達と一緒にやってきたのだ。

「あ～！私の友達が来た！！」

いぶかしげな顔をする中国人達に「三年前に来た時に友達になった子なの！」と告げると私は勢いよく席を立ち、少年達のバイクに駆け寄って行った。

再び少年に会えたのが嬉しくて表に飛び出し駆けて行った私に、亜丁の少年は同年代の友人の手前なのか、ちょっぴり生意気そうな仕草と口調で私に向かって「乗ってみる？」とバイクを指差し「うん！」と答えた私にバイクのキーを手渡した。

キーを差込みセルモーターを回すとバイクのエンジンがうなり声を上げた。バイクに乗るのはずいぶん久しぶりだったが、以前は400ccの中型バイクに乗っていた私だ。

小型バイクなんて問題じゃない。勢いよく表の道路に走り出すと昼間歩いた道をバイクで駆け上がって行った。道路の脇にある金色の麦畑が視界の端を流れていく「うひゃあ！気持ちいい！！」

道の小石をはね飛ばしながら亜丁村の道を先程村を見おろした峠の上まで一気に駆けて行くと、バイクを傾けてUターンしようとしたその時だ。舗装されていない坂道の砂利に滑ったバイクはズザザッと音を立てて派手に転倒した。「いった～い・・・！！」道に投げ出されて擦りむいた手のひらを押えつつ、服のホコリを払って立ち上がった私がバイクを起こそうとすると、なんという事か少年のバイクは転倒した際、道に叩き付けられた左ハンドルの下のクラッチレバーが折れてしまっていた。

「ど、ど、ど、どうしよう～」手のひらの痛みも忘れてうろたえた私は、その場で泣き出したい気分だった。街の中ならいざ知らず、こんな村ではバイク屋などあるわけがない。もしかしたらこの村から100キロ程も離れた稻城まで行かなければバイクの修理など出来ないかもしれないのだ。少年が日常の足として大事にしているに違いないバイクを、かりてからたったの5分で壊してしまった。

オレンジ色に染まろうとしている亜丁村の空の下で、しょげかえた私は途方にくれていた。（次号に続く）